

ドイツ語圏におけるメッセージ ソングのテキスト研究

——研究方法および研究・教育上の可能性——

高 橋 慎 也

序：本論の目的

本論は、ドイツとオーストリアを中心とするドイツ語圏の国々で生まれたメッセージソングのテキスト研究の研究手法と研究視点に関して私見を述べることを目的としている。私が行っているこの研究はいまだ試行錯誤の段階で、明確な研究方法と研究視点を模索している段階である。しかしこれまでの研究の過程で、実証的な研究を進める際の資料の収集方法や、実際の授業で用いる場合の要点などについてある程度の経験と成果を提示できる時点には達しつつある。そこで本論では資料の収集方法と授業資料の作成方法の2点を中心として述べてみたい。またそれを踏まえて私に関心を持っている研究・教育上の可能性について簡単に触れてみたい。

私がドイツ語圏のメッセージソングに関心を持ち始めたのは今から15年ほど前のことである。最初はドイツ語授業のコーヒー・ブレイクとして学生に紹介すると共に、その内容に関して簡単な解説を加える程度であった。その後、10年くらい前から各時代の社会的テーマを反映しているメッセージソングを教材としてのみならず研究対象としても捉えるようになった。今から振り返ってみれば私がこの分野に関心を持ち始めた1980年代半ばは、メッセージソングを歌う歌手である Liedermacher の人気が衰え始

めた時期に相当する。しかし1980年代初頭にはLiedermacherに関する簡単な辞書がいくつか出版され、その後LPレコードのCD化による再発売も進んできていたので、1980年代半ばという時期は1960年代後半から1980年代に至るLiedermacherシーン全体を見渡すにはいい時期であった。その後幸いにも文部省の科学研究費を2回給付されたことによって資料の収集が大幅に進み、1990年代初頭にはドイツとオーストリアの代表的なLiedermacherの主なレコードを研究資料として、両国のLiedermacherシーンの大まかな見取り図を描くことができるようになった。そこで研究成果を『Liedermacher 研究 (1)～(4)』として論文化すると共に、日本独文学会の一般研究発表会およびシンポジウム「ドイツ語圏におけるポップ・カルチャー研究の可能性」の場で公表してきた。現在の私の研究対象はドイツ統一以降のこの10年間のドイツ語圏のメッセージソングのテキスト研究に移ってきている。

私がこの分野に関心を持つようになった理由の一つは、これらのメッセージソングが教育面で大きな効果を持っていることを教壇の経験から実感してきたことにある。すでにドイツの語学教科書会社から“Mein Gespräch, meine Lieder: Liedermacher in Deutschunterricht/[Red.: Sabine Wenkums]. Langenscheidt, 1986.”といった教科書も発行され、Liedermacherのメッセージソングのテキストが語学教材として効果的であることは以前から注目されている。しかし私が注目しているのは、これらのテキストの語学教材としての特性よりもむしろ抒情詩の一形態としての文学的特性、テキストと社会現象との相互関係に見られる社会的特性、またその大衆音楽商品としての流通形態に関するメディア的特性である。メッセージソングのテキスト研究は以上のようなアクチュアルな研究として展開し得る可能性を持っていると私は考えている。こうした研究可能性に関する私の研究レベルはまだアイデアの段階であるが、本論では私見と

してこの種の可能性についても簡単に触れてみたい。

第1章：実証的研究の方法

メッセージソングのテキスト研究を進めるためにはまず、研究対象となるテキストを収集することが必要となる。そのためには次のような手順を踏んで行くのが有効である。

- 1) Liedermacher 関係の辞典と解説書の収集
 - 2) 代表的 Liedermacher およびメッセージソングの選定
 - 3) 代表的メッセージソングを含むレコードの収集
 - 4) メッセージソングのテキストの収集
- 1) の辞典に関しては以下のような文献がある。
- Henke, Mathias: Hermes Handlexikon Die großen Chansonniers und Liedermacher, 1987
 - Siniveer, Kaarel: Folk Lexikon, Rowolt Taschenbuch Verlag, 1981
 - Edenhofer, Julia: Rock & Pop Lexikon, Franz Schneider Verlag, 1986

また解説書に関しては以下のような文献がある。

- Nyffeler, Max: Liedermacher in der Bundesrepublik Deutschland, Inter Nationes, 1982
- Rothschild, Thomas: Liedermacher, Fischer Taschenbuchverlag, 1980
- Kerschkamp: Die großen Liedermacher, Moewig Verlag, 1981
- Brigl, Kathrin; Schmidt-Joos, Siegfried: Selbstredend...I, roro-ro 5602, Rowohlt Taschenbuchverlag, 1985

上記の辞典や解説書の中には絶版となっているものが少なくないが、東

京のゲーテ・インスティテュートの図書館に所蔵されている本もある。絶版となった本のコピーを手に入れるためには本を所有しているドイツの図書館を特定し、我々が勤務している大学の図書館窓口を通してコピーを申し込むことになる。ドイツの図書館の蔵書を検索するには日本独文学会のインターネット・ホームページにリンクされているドイツ各地の州立図書館ないしは国立図書館の蔵書カタログを利用するのが便利である。またドイツの多くの大学図書館の蔵書目録もインターネットで検索することができる。

メッセージソングに関する辞典や解説書によって、代表的な *Liedermacher* や代表的なメッセージソングがある程度特定できるので、次に3)のレコードの収集という作業に入ることになる。レコードの収集のためには、辞典や解説書さらにはドイツで発売されているレコード・カタログを調べ、レコード番号を記載した注文書を作ってゲーテ書房や郁文堂といったドイツ書籍店に発注する必要がある。また現在流通しているCDの検索と発注に関しては次のインターネットのホームページが便利である。

○Cyber-CDのホーム・ページ (<http://www.cybercd.de/sucheingangd.htm?id=37f470a7lcmd=main>)

注文はインターネットを通じて直接行うことができるし、決済もクレジットカードによって行うことができる。価格はCD一枚につき15マルクから35マルク程度、平均すれば25マルク程度である。

中古のレコードを収集する必要がある場合には、以下に挙げる中古レコード・カタログが便利である。

○Goldman, Frank-Michael (hrsg): *Der große Preiskatalog '99*, Vereinigte Motor-Verlag, 1998

○Wiaderni, Robert: *Der große Österreich-Katalog, Austro-Vinyl-Archiv 1999* (このカタログは Robert Wiaderni, Nestroyst. 17/13,

A-2700 Wr. Neustadt, Austria 宛てに直接注文して購入する)

中古レコードについては日本から直接発注することができない点が、研究資料収集上の大きなネックとなる。私の場合にはドイツ研修やドイツ留学の機会を利用して、中古レコードを収集してきた。中古レコードを収集するためには中古レコード店や「蚤の市 (Flohmarkt)」に行つて必要なレコードを探すのが一般的だが、これにはかなりの時間と労力を必要とする。そこで最も効率的なのはドイツ・オーストリアの各都市で定期的に行われている中古レコード市に行つてレコードを収集することである。この中古レコード市は“Schallplattenbörse”ないしは“CD und Schallplattenbörse”という名で呼ばれており、数十店の中古レコード屋が体育館などに仮店舗を並べるので効率的にレコードを見つけることができる。この中古レコード市の日程は先に挙げた“Goldman, Frank-Michael (hrsg): Der große Preiskatalog '99, Vereinigte Motor-Verlag, 1998”に記載されている。中古市ではレコード5枚くらい買えば10%程度は値引きしてくれることが多い。大手の中古レコード店はカタログを発行している場合もあるので、日本からカタログによる注文をすることも可能である。その場合の支払いは郵便小切手あるいは銀行振込となる。中古レコードを研究費で購入する場合には、立替払いとなるので領収書を出してもらう必要がある。中古レコード市は普通は7月から9月半ばまでは開かれないので、我々が夏休みを利用して渡独した場合には利用できないのが難点である。

以上のようにレコードの収集にはかなりの時間と労力、それに費用がかかる。ただ近年はCDによる旧譜の再発売が進み、インターネットを利用して注文し、クレジットカードによって決済することができるようになったので、予算さえあればレコードの収集は以前に比べて格段に楽になっている。

レコード収集の際の問題点としては、収集すべきレコードの点数が多い

ということも挙げられる。一人の Liedermacher が発表してきたレコード枚数が 20 枚以上に及ぶことも希ではない。こうした中で必要な全てのレコードを収集しようとすれば膨大な時間・労力・費用がかかることとなる。研究者には普通そのような余裕はないので、収集すべきレコードの絞り込みが必要となる。絞り込みのためには研究上の視点をどこに設定するかという点が重要となるが、そればかりではなくどのレコードの評価が高いかという点を考慮する必要がある。レコードの評価を測る上で目安となるのはヒット・チャートとレコード評である。ドイツのヒット・チャートに関しては Ehnert, Günter 編集による以下の文献がある。

○Hit Bilanz Deutsche Chart LP's 1962-1986, Taurus Press, 1988

○Hit Bilanz Deutsche Chart LP's, British Chart LP's, US Chart LP's 1987-1990. Taurus Press, 1992

○Hit Bilanz Deutsche Chart LP's, British Chart LP's, US Chart LP's 1991-1994. Taurus Press, 1996.

○Hit Bilanz Deutsche Chart Singles 1956-1980, Taurus Press, 1990

○Hit Bilanz Deutsche Chart Singles 1981-1990, Taurus Press, 1994

○Hit Bilanz Deutsche Chart Singles 1991-1995, Taurus Press, 1996

またレコード評を掲載しているドイツの代表的な音楽雑誌としては以下のようなものがある。

○Musik-Express/Sounds

○Spex

○Rolling Stones

○Zitty

さらに各歌手に関する紹介本や歌詞を紹介した本、またヒット曲を集めたアンソロジーなども収集すべきレコードの絞り込みには有効である。この種の文献の中で特に便利と思われるのが以下の文献である。

○Buhmann, Heide, u.a.: Liederbuch der Rock- und Songpoesie, Bd. 1, 2, Verlag Buhmann und Haeseler

近年では大手の音楽会社、テレビ局、ラジオ局、また Liedermacher 自身の開設したインターネット・ホームページから情報を収集することも可能となった。私が利用しているのは次のようなホームページである。

○レコード会社 BMG のホームページ (www.bmg.de)

○オーストリア第3放送局のホームページ (www.austria3.at/)

以上、本章では試行錯誤を経て私が見出した資料収集の方法について述べてきた。メッセージソングの通時的・共時的全体像を細かに把握しようとするとかかなりの時間・労力・費用がかかることは避けられない。しかし1980年代初頭までの旧西独の Liedermacher シーンの大まかな全体像を把握するには先に挙げた“Nyffeler, Max : Liedermacher in der Bundesrepublik Deutschland, Inter Nationes, 1982”を見ればよいので、それほど手間はかからない。この文献にはカセット・テープによる作品例が添付され、歌詞も記載されているので教材としても使用しやすい。どの程度の資料を収集すべきかという問題は、各研究者がそれぞれの研究視点や利用目的に応じて解決してゆけばよいのである。

第2章：資料の整理と分類

次に本章では収集したレコードと歌詞の整理と分類の方法について述べてゆきたい。この方法についても各研究者の研究視点と利用目的に応じて多様性がある。私の場合には以下のような目的を設定して、1960年代から1990年代に至るドイツ語圏のメッセージソング関係の資料の整理と分類に当たってきた。

- 1) 代表的な Liedermacher の代表的な作品を年代ごとに整理すること
- 2) 各時代のメッセージソングのテーマに見られる時代的特徴を明らか

にすること

3) メッセージソングのテーマの時代的な推移を明らかにすること

4) 代表的なメッセージソングを学生向けの講義やゼミで使用すること

まず最初に代表的な Liedermacher の代表的な作品を参考文献から特定してそのテキストを収集し、A4 の紙に張りつけていった。当初は「コピーの後に切り張りする」という方法を取っていたが、2年前から OCR ソフト(文字読み取りソフト)を用いてテキストファイルとしてパソコンに保存するようにしている。その際の手順はテキストが何に印刷されているかによって異なる。「歌詞集」として本に収録されているテキストに関しては、本のページをスキャナーで読み取り、OCR ソフトを用いてテキストファイル化している。CD ジャケットや LP ジャケットに印字されているテキストに関しては、多くの場合拡大コピーしてからスキャナーを用いて OCR ソフトで読み込ませている。そうしないと読み取り精度が大幅に落ちるからである。OCR ソフトは Win Reader Pro. Ver. 5.0 を用いている。この OCR ソフトの精度は高く、本に印刷されているドイツ語テキストの誤読は極めて少ない。CD ジャケットからコピーしたテキストに関しては、元の文字が小さくかつ印刷も不鮮明である場合が多く、誤読が多くなる。誤読が多くなれば訂正に時間がかかるので、作業としてはかなりの時間と労力を要することになる。OCR ソフトを用いたテキストファイル化の作業は時間的・肉体的な負担が大きいので、今後はこの作業の一部を学生アルバイトに依頼する予定でいる。ただメッセージソングの歌詞を一旦テキストファイルとしてパソコンに取り込むとその先の作業はかなり楽になるので、テキストファイル化は研究・教育を進める上で重要なステップである。

以上の作業を通してメッセージソングのテキストの整理を進める一方で、代表的な Liedermacher の資料の整理も進めている。Liedermacher については写真、経歴、ディスコグラフィ、代表的作品名を記載してゆく。

次に講義やゼミで使用するためにドイツ語テキストに日本語訳を付けてゆく。授業用資料としてメッセージソングを使用する場合には日本語訳の添付は必須であるとは私は考えている。かつて私のゼミで、メッセージソングのテキストを日本語に翻訳するという課題を学生に与えたこともあったのだが、この種のテキストは口語的であったり時事性が強かったりして学生が翻訳するには難しすぎる場合が多かった。そうなるとメッセージソングの歴史的展開はもとより一人の Liedermacher の特徴も捉えられないままに1年が終わってしまう。そこで今では授業でこの種のテキストを使用する際には日本語訳を添えるようにしている。そうするとたとえば次のような授業用資料ができあがる。

(資料例)

Trotzdem für Anna (1981) それでもなお アンナのために (LP『かさぶた (Narben, 1981)』より)

作詞・歌：エリーカ・ブルーハール (Erika Pluhar, 1939-)

作曲：トニー・シュトリッカー (Toni Stricker)

Schau dir das hingespukte Stück	吐き捨てられた人生を見てごらん
Leben an	
Vom Geborenwerden bis hin zu	生まれた時から死ぬ時まで
einem Tod	
wie das nur weh tut und uns	人生がただつらく、私たちを苦しめ
quält	
und müde macht das Suchen	幸せを求めても徒労となる様子を。
nach dem Glück	

Trotzdem kämpfen wir	それでもなお私たちは戦い
trotzdem glauben wir	それでもなお私たちは信じ
trotzdem lieben wir	それでもなお私たちは愛し合う
trotzdem	それでもなお

Schau dir all die verbrauchten Gesichter an	時間との戦いに負けて
die sich selbst verloren haben vor der Zeit	すりきれてしまった顔をみな見てご らん
und wie man sie gebrochen hat mit System	不安のためにこんなに従順になると いう理由だけで
nur weil die Angst so sehr gefügtig macht.	これらの顔がシステムで破壊されて しまった様子を。

Trotzdem kämpfen wir	それでもなお私たちは戦い
trotzdem glauben wir	それでもなお私たちは信じ
trotzdem lieben wir	それでもなお私たちは愛し合う
trotzdem	それでもなお

Schau dir die Welt und ihre Kriege an	この世界とその戦争を見てごらん
das endlose Morden, die die Zerstörungen ohne Sinn	際限の無い殺戮と、意味の無い破壊 を
und wie man unsern Stern ver- dirbt und langsam schleift	ただお金が世界を牛耳っているとい う理由だけで、

nur weil das Geld die Welt regiert
我々の星が破壊され、ゆっくりとすりへってゆく様子を。

Trotzdem kämpfen wir
trotzdem glauben wir
trotzdem lieben wir
trotzdem
それでもなお私たちは戦い
それでもなお私たちは信じ
それでもなお私たちは愛し合う
それでもなお

Schau dir den Baum vor deinem Fenster an
die Blätter in Regen, die Blätter im Licht
wie er sich aufrecht hält wie ein Wort
und nicht schweigen will, bis man ihn fällt
窓の前の木を見てごらん
雨に濡れる木の葉と、光に揺れる木の葉を
木が言葉のようにまっすぐに立ち、切り倒されるまで、沈黙しようとしていない様子を。

Trotzdem kämpfen wir
trotzdem glauben wir
trotzdem lieben wir
trotzdem
それでもなお私たちは戦い
それでもなお私たちは信じ
それでもなお私たちは愛し合う
それでもなお

(解説) エリーカ・ブルーハール (Erika Pluhar, 1939-) はウィーン在住の女優・シャンソン歌手。ヒットラーによってオーストリアがドイツに併合されていた1939年にウィーンに生まれ、幼年期に戦中・戦後の混乱期を体験した。戦後は市民的環境の中で「優等生」としての子供時代を送り、

57年に演劇学校『マックス・ラインハルト・セミナー (Max-Reinhardt-Seminar)』に入学し、59年からはブルク劇場の舞台に立つ。21歳の時にデザイナーのセルゲ・キルヒホフ (Serge Kirchhof) と結婚し、娘アンナ (Anna) をもうけるが、その後に離婚。68年にテレビ映画『ベル・アミ (Bel ami)』 (モーパッサン原作) で人気女優となり、「プロンドの妖婦」というイメージが定着する。70年にシャンソン歌手のアンドレ・ヘラー (André Heller) と再婚し、ヘラーに触発されてシャンソン歌手としての音楽活動を開始し、戦前のドイツ・シャンソンやヘラーの曲をレパートリーとする。73年にヘラーと別居する。74年に初めてのコンサートをケルンで開く。俳優のペーター・フォーゲル (Peter Vogel) と同居を始めるが、フォーゲルは78年に自殺を遂げる。79年には、東独から追放された反体制歌手のヴォルフ・ビーアマン (Wolf Biermann) の歌を取めたアルバムを発表し、社会批判的な政治姿勢を明確にしていく。その後、女性の自立を主なテーマとする自作の歌詞を作り始め、80年代には平和運動にも積極的に参加するようになる。81年にポルトガルのミュージシャンと協力して作ったアルバム『人生について (Über Leben)』によって歌手としての新たな境地を開く。さらに80年代には新たにギタリストのペーター・マリノフ (Peter Marinoff) とピアニストのアントニオ・ヴィクトリア・ダルメイダ (Antonio Victoria D'Almeida) と組んでコンサート活動をし、レコードを発表する。1991年にマリノフが急死した後は、主としてダルメイダと組んでコンサート活動を行っている。

LP『かさぶた (Narben, 1981)』はブルーハールの歌手としての転機を示すアルバム。この年に発表したLP『途上 (Unterwegs, 1981)』と同様にこのアルバムでも、ブルーハールは歌詞を自分で書いている。歌詞は女性の自立をテーマにしたものが多い。『かさぶた』はブルーハール自身の個人的経験から生まれたLPではあると同時に、1970年代にドイツ語圏でも台

頭したフェミニズム運動に触発されて生まれた LP とも言えよう。『それでもなお (Trotzdem)』という作品は、娘のアンナに送る母ブルーハールの人生のメッセージという形式を取っている。

主なディスコグラフィー：

- 『エリーカ・ブルーハールが歌う (Erika Pluhar singt, 1972)』
 - 『ポートレート (Portrait, 1974)』
 - 『人生あれこれ (So oder so ist das Leben, 1974)』
 - 『エリーカ・ブルーハールの愛の歌 (Die Liebeslieder der Erika Pluhar, 1975)』
 - 『エリーカ・ブルーハールのウィーンの歌 (Die Wiener Lieder der Erika Pluhar, 1975)』
 - 『ブルーハール、ビアマンを歌う (Pluhar singt Biermann, 1979)』
 - 『途上 (Unterwegs, 1981)』
 - 『かさぶた (Narben, 1981)』
 - 『人生について (Über Leben, 1982)』
 - 『それにもかかわらず (Trotzdem, 1982)』
 - 『トリオ (Das Trio, 1984)』
 - 『マリノフによるボサノバ (Bossa à la Marinoff, 1989)』
 - 『ウィーンの歌 (Wiener Lieder, 1990)』
 - 『トリオ 10 年間の歌 (Lieder aus 10 Jahren Trio, 1991)』
 - 『ナッシュマルクトの夕べ (Ein Abend am Naschmarkt, 1995)』
- (以上、資料例)

授業用資料には写真や図版も取りいれて、視覚的にも分かり易くなるように努めている。写真や図版はスキャナーで取り込み、ワープロ・ソフトの WORD 95 あるいは WORD 98 に貼り付けている。図版をスキャナーで

取り込む際の精度はカラー256色, 100 dpi, 図版1枚あたり100 KB程度を基準にしている。ファイル・サイズをこの程度に押さえておかないと, WORDに貼り付けて処理するのが難しくなるからである。ドイツ語・日本語・図版によって構成されるファイルを作成する際のワープロ・ソフトとしてはWORD98が優れている。私は以前, ワープロ・ソフトとしては主に「一太郎」を使用していたのであるが, 「一太郎」は図版を貼り付ける際に難点があり, 印字もWORDに比べ見にくいという欠点があった。

以上, 授業用の教材を作成した時点で資料の整理は一段落することになる。次の作業は資料の分類となるのだが, この分類作業は研究目的に応じて変化する。私がこれまで進めてきたのは主に, 各Liedermacherの代表的作品を年代別に分類する作業, また各年代の代表的な作品を分類する作業, および作品をテーマ別に分類する作業の3種類の分類作業である。3番目のテーマ別の分類の際には「ナチズム問題」, 「環境問題」, 「外国人問題」といったテーマを設定している。この作業は現在進行中の段階である。こうした整理・分類作業が進むと, 資料を特定の視点から分析するという本来の研究作業が可能となる。

第3章：メッセージソングのテキスト研究の可能性

メッセージソングは, 言語作品と社会との相互関係を研究対象とする社会文芸学的研究, また言語作品とマスメディアとの相互関係を考察するメディア論的研究などを行う際にも有利な研究素材である。私はメッセージソングが一定の政治的効果を持ち得るという可能性は排除しないが, それを積極的に評価する立場を取らない。またハイ・カルチャーとしての純文学の特権性を相対化するサブ・カルチャー・テキストのひとつとしてメッセージソングを別の立場から特権化する視点も今では実効性を失っていると考えている。メッセージソングのテキスト研究の可能性に関しては現在

もまだ模索中の段階である。これまでは旧西ドイツとオーストリアのメッセージソングに関して、1960年代から1980年代までの歴史的展開を明らかにし、テキストに反映している時代精神を描き出すことを中心として研究を進めてきた。その成果は日本独文学会の研究発表会やシンポジウムで公表すると共に、以下の論文にも発表してきた。

- 1) Liedermacher 研究 (1) — Liedermacher とは何か (中央大学『ドイツ文化』47号, 1992)
- 2) Liedermacher 研究 (2) — 旧西ドイツ Liedermacher シーンの変遷 (中央大学『人文研紀要』33号, 1998)
- 3) Liedermacher 研究 (3) — オーストリアの Liedermacher シーンの展開 (中央大学『紀要文学科』84号, 1999)
- 4) Liedermacher 研究 (4) — オーストリアの Liedermacher の経歴と作品 (中央大学『ドイツ文化』54号, 1999)

こうしたドイツ語圏に限定した通時的研究と並んで、私が近年関心を持っているのは次のような視点からの研究である。

- 1) 新たなドイツ国民文化形成運動としてのメッセージソング研究
- 2) ドイツとオーストリアのメッセージソングに見られる両国の文化的差異の研究
- 3) メディアと言語文化との相互関係から見たメッセージソング研究
- 4) 言語の表現形式と表現内容から見たメッセージソング研究
- 5) 新たな「民衆芸術」としてのメッセージソング研究

1)～5) のそれぞれの研究視点に関してはまだアイディアの段階であるが、私見として簡単に素描してみたい。

1) 新たなドイツ国民文化形成運動としてのメッセージソング研究

1960年代から現在に至るドイツのメッセージソングの展開は、18世紀後

半から 19 世紀前半に展開したドイツ国民文学形成運動や 19 世紀末から 20 世紀初頭に展開した「モデルネ」文学形成運動とパラレルのドイツ国民文化形成運動と捉えることができる。両者とも次のような共通の過程を経て展開していると見ることができるからである。

- 新たな政治・社会構造の形成
- 新たな社会的支配階級の形成
- 新たな文化の生産者と受容者の形成
- 文化表現手段と文化伝達手段の発展
- 文化的先進国における新たな文化のドイツ語圏への輸入
- 先進国における新たな文化とドイツの伝統文化との融合
- 新たなドイツ国民文化の形成
- ドイツ国民文化の国外への輸出
- ドイツ国民文化の世界文化への発展
- 政治・社会構造の変化に伴う社会的支配階級の交代
- 新たな文化表現手段と文化伝達手段の発展
- 文化の主たる生産者と受容者の交代
- 新たな文化の台頭による旧来の文化の衰退

1960 年代に台頭し 1980 年代後半に衰退したドイツの Liedermacher シーンは以上のような文化の台頭と衰退という一般的なサイクルを描いたものと私は捉えている。こうした捉え方は今後のドイツ文化の展開を予測する上でも有効だと私は考えている。オーストリアのポピュラー音楽シーンの展開を国民意識との関係から論じた論文としては以下のものが大きな参考となる。

- Larkey, Edward: Constructing Identity with Popular Musik in Austria, Peter Lang, 1993

2) ドイツとオーストリアのメッセージソングに見られる両国の文化的差異の研究

1960年代のドイツのメッセージソング運動は、主としてアメリカとアイルランドのフォーク・リヴァイヴァル運動、フランスの社会批判的シャンソンの影響下に成立したものである。メッセージソングという新たな文化領域におけるこれらの先進国とドイツ・オーストリアとのメッセージソングのテキストを比較することによってドイツ・オーストリアのメッセージソングの特徴が明らかになる。これまでの研究過程で私が特に興味深いと思っているのはしかし、ドイツとオーストリアのメッセージソングの比較から見えてくる両国の文化的差異、特にオーストリアの文化の特殊性である。オーストリアはドイツと同じドイツ語文化圏であるので、国民文化としてのオーストリア文化を対外的に主張することが困難であるという問題を抱え続けている。特にハプスブルク帝国解体以降はその困難さが増してきている。その結果、オーストリア人は自分の作品のオーストリア性を消去してドイツ文化として提示するか、あるいは絶えずオーストリア性を再生産し国内的にも対外的にも強調するか選択しなければならないという状況に陥りがちである。オーストリア性を主張する場合には、それはドイツ語圏以外の国に向けられると同時に、とりわけドイツ本国に対して向けられることになる。しかし文化市場としてのドイツのオーストリアに対する優位は圧倒的なもので、オーストリア人の(Liedermacherも含む広い意味での)芸術家は経済的にはドイツ市場に大きく依存せざるを得ない。ドイツで売れるためにはオーストリア性を消去するという方法とオーストリア性を強調するという二つの方向があり、オーストリアで売れるためにはオーストリア性を強調する必要がある。こうした状況下で生み出されたオーストリアのメッセージソングを見ると、ドイツ的であってオーストリア的であるという複層性が見えてくるのみならず、オーストリアの「国民文化」と

いう概念の限界も見えてくるのである。純粋な国民文化というものは有り得ず、どの国民文化も実際には異文化間の交配から生まれた「異種混交(ハイブリッド)文化」であるという文化観を証明する際に、オーストリアのメッセージソングはその格好の材料を提供してくれる。

3) メディアと言語文化との相互関係から見たメッセージソング研究

メッセージソングはその流通形態という点で、抒情詩と対照して比べることができる。近代の抒情詩の台頭には印刷技術の進歩によって本の流通が促進されたことが大きく与かっている。特に19世紀から20世紀への世紀転換期頃には印刷・製本技術のさらなる発展によって雑誌の刊行が容易になったことが抒情詩の流行を大きく促している。それに対しメッセージソングの流行には録音・再生技術の進歩によってレコードの流通が促進されたことが大きく与かっている。特に1960年代以降はレコード盤やレコード・プレーヤーが一般の若者でも手に入れることのできるくらいにまで普及したことがメッセージソングの世界的流行を促している。1960年代以降のドイツ語圏のメッセージソングの台頭は戦後ドイツの抒情詩の台頭を相対化する作用を持っていたと解釈することもできる。私はまだ実証的な資料は持たないが、新たなメディアの発展が言語文化の盛衰を大きく規定しているように思われる。これを実証的に裏付ける作業は、一つのメディア論ともなり得るであろう。

4) 言語の表現形式と表現内容から見たメッセージソング研究

メッセージソングはその形式・内容の両面から歌謡曲のテキストと純文学の抒情詩の中間段階にあって、両者を相対化する特性を備えている。つまりメッセージソングのテキストは、歌謡曲や抒情詩のテキストと相互に比較されることによってこれらのテキストの特徴を批判的に明らかにして

くれるのである。端的に言えば、現代の抒情詩はテキスト表現の固有性・秘儀性ないしはそれとは対照的なテキスト表現の簡潔性とそこから生じるテキスト解釈の多義性を特徴とし、歌謡曲はテキスト表現の平明性とテキスト解釈の一義性を特徴とする。メッセージソングのテキストは反戦、反原発、環境破壊反対、外国人との融和などの明確なメッセージ性を持つ点では平明だが、表現形式として多様な比喩的・象徴的な技法を用いる点では多義的である。抒情詩、歌謡曲のテキスト、メッセージソングのテキストは、形式、内容、生産者と受容者、流通形態、経済性などの面でそれぞれ相互に比較されることによって、お互いの特徴が明らかになってくる。これら3種類のテキストは、表現形態の長所・短所、読者層、流通形態、経済性などを全体的に考量すると価値的には等価であると見なし得る。しかし抒情詩を中心に考えた場合には、歌謡曲とメッセージソングとの比較によって抒情詩に特有の魅力を提示することができるということになる。

私の講義や授業において、メッセージソングのテキストを教材にする際にはいわゆる純文学の抒情詩を同時に提示し、両者を相互に比較しながらそれぞれの特性を説明している。こうした授業方法を取ることによってヘルダーリン、リルケ、ブレヒト、バッハマン、ツェラーンといった作家の、学生には馴染みが薄くやや難解な詩を授業に導入し解説を加えることが容易になる。ドイツ文学に関心を持つ学生が大幅に減少する中で、多数の学生を相手にして講義をする場合に、テキストとして比較的短く、同じテーマに関して国際的な相互比較をし易いメッセージソングは教材として大きな強みを持つ。

5) 新たな「民衆芸術」としてのメッセージソング研究

やや抽象的なレベルで私が現在、関心を持っているのはドイツの近・現代の文化において「民衆 (Volk)」という概念と「芸術 (Kunst)」という

概念、および両者が結びついた「民衆芸術 (Volkskunst)」という概念がどのように形成され、内容的にどのように変遷してきたか、という問題である。現代の大衆芸術を形容するひとつの用語として「民衆芸術」という言葉が用いられることはもはやない。近年それに代わって用いられるようになってきているのはおそらく「ポップ・カルチャー」という用語であろう。かつて大衆と対立的に用いられた知識人ないしは教養人という社会階層も政治的・経済的・精神的内実の空洞化が進み、今では共同体の成員全てが大衆という状況にある。「芸術ないしは文化の民主化」という観点から見れば、これは芸術と文化の完成形態に近づいたということになる。この「民主化」はしかし従来の「ドイツ文学研究」の枠組みを破壊し、「ドイツ文学専攻」の研究・教育の内容をも変えようとしている、と捉えることができる。こうした状況下では、我々日本のゲルマニストはポップ・カルチャーを批判的に研究・教育に取り込みながら、従来の古典的文学テキストの活性化を図るという試みを行ってゆく必要があるだろう。こうした試みを実行する上でもメッセージソングのテキストは有効な資料となる可能性を秘めている。

以上、Liedermacher 研究の可能性に関して私見を素描してみた。これまでの Liedermacher 研究の過程で私が痛感しているのは、資料の収集と整理が難しいという問題よりもむしろ、この種の研究の日本における社会的意義を確立することが難しいという点である。日本で Liedermacher の LP や CD がほとんど発売されていない以上、実証的な Liedermacher 研究だけではドイツ語圏の地域文化研究の枠を越えることはできず、Liedermacher 研究に対する日本の社会的関心と需要を喚起することも困難である。フランスのシャンソンのレコードが日本でも発売され、一定の社会的需要を得ていることに比べるとこれは研究にとっても不利な条件である。また個々の作品の社会的あるいは芸術的な価値を長期にわたって主張でき

るような文化領域ではないので、Liedermacher 個人や個別作品を詳細に研究するだけでは、研究の社会的価値を十分に主張することができない。実証的な研究という点ではイギリス・アメリカ・アイルランドおよび日本などのフォークソングやフランスのシャンソンとの比較研究を行うことによって初めてその社会的価値を主張できることになろう。しかしこうした比較文化研究には相当の時間・労力・費用が必要となる。そこでこうした比較文化研究を行うためには共同研究が必要となろう。個人が行う Liedermacher 研究として私に関心を持っているのは、先に述べたように言語文化と社会構造との相互関係を研究する社会学的な研究、ないしは言語文化とマスメディアとの関係を研究するメディア論的な研究といった、ある特定の視点からの Liedermacher 研究である。一つの社会理論あるいはメディア理論の有効性を証明するためのケース・スタディとして Liedermacher 研究を行うことの方が、研究の一般性と社会的有効性を確立し易いように思われる。また従来の文学研究の方法を適用しやすいという点では、純文学の抒情詩と Liedermacher の作品を表現形式、表現内容、表現手段、伝達手段、生産者と受容者の社会的階層などの面から比較する研究が有効であり、教育現場にもその成果を反映させやすい。

